

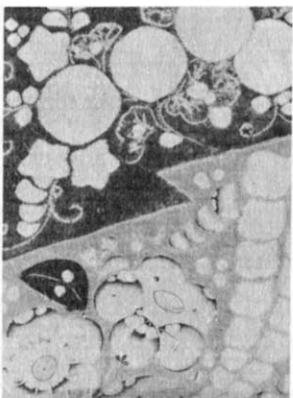
〈辻が花〉の語源

カット 辻が花裂

(上) 徳川美術館蔵

(中) 瑞泉寺蔵

(下) 根津美術館蔵



謎につつまれた美しい染物といわれていた辻が花染も最近ではそれが室町初期から江戸初期へかけて用いられていた絵模様染で、その模様や色彩及び技法についての実態は、現存遺品によって確認することが出来るようになった。辻が花は、基調となる絞り染のもつやわらかな味わいに加えて、繊細な描き絵或は華麗な金銀箔や刺繍などが渾然となってそこに独特の深い趣きを湛えている。その格調高い美しさと〈辻が花〉という名称のもつ語感とは、不思議なほどよく合致している。しかし何故これを〈辻が花〉とよぶのか、その語源についての謎は未だ解かれず、辻が花に関心をもつ人々が誰しもそこに疑問を抱くのである。

辻が花の全盛期と思われる慶長頃に青年であった俳人松永貞徳は、「つじが花もつゝ、じが花ということの中略したる名なれども、あきかたびらの名成たれば春の季にならず。かたびらにひかれて夏の句に成なり」といっている。つじが花を略してつじが花というとするこの説は、のちに天明頃の武家故実家伊勢貞丈が、「つゝ、じの花は赤き物なる故紅にて染たるをつじが花という」と支持しているが、一方では山崎美成が辻が花には地の白いものも黒いものもあって紅にかぎらないのでこの説を非なりとしている。替否両論のところへ草双紙作者柳亭種彦は、「つちは十字街なるべし。此形に花をつなぎて染たるをつちが花」というとして、辻が花の模様のなかに多い斜格子模様から辻の名が生まれたとの新説を出した。しかしこの説も思いつきのようなもので決定的なものでもないし、また貞徳説も同様である。近年では奈良の本辻という町で作られたとか、また辻君（遊女）が着ていたからなどともいわれるがいずれも根拠はない。天文4年堺の町につしがはなの屋号があることや慶長8年日本耶蘇会で刊行された「日葡辞書」に辻が花の語がのせられていることなどから当時広く一般に知られていた言葉であったことは確かであるが、語源を解明し得る資料は未だ発見されていない。

季刊 美のたより No.17

昭和46年 5月1日

発行 大和文華館